

#### 4-5 まちづくりを考える

日常の大部分または活動するための基地としての地域について、最も基本的なことは安全で安心なものであることです。しかし、自然災害のように突然出くわすものは、あつて初めてわかることも多く、事前から備えておくということには関心も薄くなっています。しかし、自然災害だけではありませんが、被害があつてからの対応は想像以上の負担が大きいもので、単なる経済的なものに限らず精神的にも負けてしまいそうな場面が次々に現われるというものです。我々は、東日本大震災で経験してきてはいますが、そのくせ徐々に忘れてしまっていることも多く、風化の速さに驚きを感じてしまいます。

ところで、地域を防災という視点で見直すとき、ヒト、モノ、情報ということが言われますが、これをどう機能させていくのかということになると、なかなか難しいものです。その原因として、ヒト、モノにしても動かすための仕組みをどうするのかもありますが、基本的には地域にどんな災害を引き起こすリスクが潜在しているのかということを確認に、共通認識として持っていないとならないということだと思います。したがって、地域毎に、その特性に合わせた備えを、自分たちで構築しておく必要があるということになります。そのためには、まず地域を知ることが大切になります。地域がどのような地理的な位置関係にあるのかをはじめとして、どのような土地の利用の歴史があるのかということです。このことから、多くのことを情報として得ることができると思います。一時前のように、土地に詳しい古老の方も少なくなっているものの、文献を検索するかそれなりの専門家の協力があれば、かなりのことが明らかになり、そこからリスクを読み取ることができます。そして、今の状況を観察するという必要となります。利便性優先で、どのようなまちの構成になっているのかを、防災という視点から見ると様々なことがわかります。そうすると、地域として対応しておくべきこと、行政が対応すべきことなどが明確になってきて、いわゆる地域の性格が明らかになって、弱点を修正したり改善するといったことがクリアになると思います。防災というと、よく自助、共助、公助ということが言われます。それぞれが大事なことですが、これらが相互に機能するようなことがもっと重要であるということ、東日本大震災で経験しました。つまり、それぞれの備えが次々に発展していくような形、互助ということを考えておく必要があります。実は、これこそがまちづくりの基本になるのではないかと思います。つまり、地域を知り、観察してその情報を共有して活かすということが大切で、すべてに人が自然災害に関心を持つということをベースにして、地域と学校の現場での防災教育が大事なことになると思います。今こそ、経験と知識を生かして、安全で安心な環境を世代にわたって作っていくことが必要だと思います。そうすれば、想定外というようなことも少なくなるし、避難、救助というような場面でも、行動するにしても救助される人もスムーズに、その場でフレキシブルに知恵や工夫が生まれて的確に行動することができると思います。要は、各人が、地域ができることをできる範囲で行える環境づくりこそが安全で安心な地域づくりにつながるものだと思います。